星槎大学機関リポジトリ

論文種別	特集
タイトル	対人関係専門職の研究と論文指導
Title	
著者	三輪 建二
Author(s)	
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	*Seisa University Research Studies in Education*
巻	Vol.4
号	No.2
ページ	pp. 13-17
発行日	March 27, 2023
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000338/

特集

対人関係専門職の研究と論文指導

Practical Research for Interpersonal Relation Professionals and Dissertation Guidance

三輪 建二[a]

（星槎大学大学院教育学研究科 博士後期課程）

１．「実践と理論の往還」のとらえ方

本研究科のアドミッション・ポリシーには、「自身の現場における教育での課題解決に向けて、実践と理論を往還しつつ研究を遂行する意欲を有する者」が、課程博士の学位をめざして実践研究を行うことが謳われている。実践・臨床現場での、ときには生々しいともいえる課題に注目し、院生自身がその課題の解決に向けて、実践の理論化をはかり、研究成果を実践・臨床現場に還元することが期待されている。

学修と研究をめぐる以上の前提については院生も、教員も共通認識に立っている。とはいえ、実践と理論との関係についてのとらえ方は必ずしも共通しているわけではない。研究指導のあり方も、教員がそれぞれに工夫しているのが現状である。

筆者は 2007 年に、柳沢昌一氏（福井大学教授）と共に監訳者となり、ドナルド・ショーンの *The Reflective Practitioner*（1983）を『省察的実践とは何か』（2007）と題して翻訳・出版する機会に恵まれた。そこでは、「実践や臨床での知は学術的ではなく厳密性に不足することから、学術研究を通して、実践の知・臨床の知の具体性を、抽象的・一般的な理論へと高める」という、一般に主張される考え方とは異なる、いわゆる「実践の認識論」が豊かに展開されている。実践の中に暗黙に潜んでいる実践知、臨床の知（中村, 1992）を出発点にし、その知を、省察（reflection）を通して言語化していくこと、実践知にも理論知とは別の意味での厳密性（rigor）があり、汎用性ある知にすることができるという実践の認識論は、筆者にはとても魅力的であった。また、本学博士後期課程で研究する院生の多くが、実践・臨床の現場で人びとと関わり合い、対人関係を主な専門とする対人関係専門職であることから、ショーンの実践の認識論に基づく論文指導ができるのではないかと考えた。

---

[a] 星槎大学大学院教育学研究科 博士後期課程教授

ここでは、対人関係専門職の院生とともに試行錯誤をしながら、実践の認識論を土台に研究論文をまとめる経緯や流れについて、筆者の基本的な考え方を述べておきたい。

２．対人関係専門職の院生の論文指導とその手順

対人関係専門職とは「医師・看護師・カウンセラー・介護士・ソーシャルワーカー・弁護士・教師に共通に見られるような『対人関係』を核とする職業」（今津, 2012, p.54）である。本学博士後期課程で学ぶ院生は、ここでの対人関係専門職にあてはまり、対人関係の中で仕事をし、そこから研究上の課題を導き出していると言える。

ショーンの実践の認識論を土台に、筆者なりに工夫しつつ行ってきた論文指導の流れを素描しておきたい。図１は次の説明の①から④まで、図２は⑤から⑦を反映している。

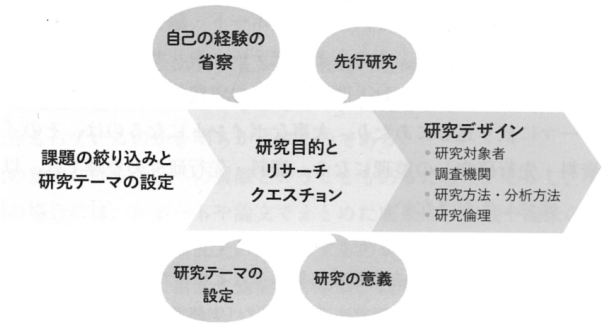

図１　経験の省察・課題の絞り込み・研究目的・研究方法

三輪（2023, p.131）

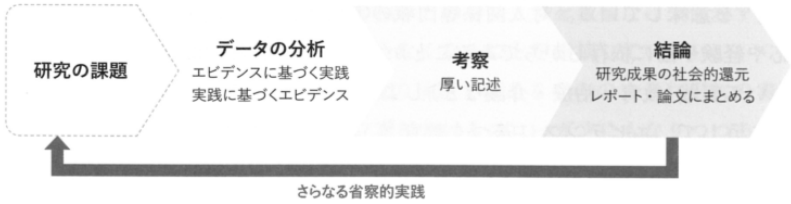

図２　データの分析・考察・結論・まとめ

三輪（2023, p.183）

1）傾聴することで大学院生の実践経験の省察を支援する

筆者はまず半年ほどかけて、大学院生から実践や臨床現場での課題を丁寧に聴いている。そこでは、すぐに理論を提供し、先行研究を提示することは行っていない。理由は、経験談に含まれる実践知・臨床の知は暗黙的であり、言語化の作業を通して明示化される

ことから、そのプロセスを尊重するためである。そして、自明になった実践知・臨床の知をふまえた研究テーマや研究目的・リサーチクエスチョンの設定へと移ることになる。

実践をめぐる経験の省察が重要であるのは、上記とは別の理由もある。対人関係専門職の中には、いわゆる「カンとコツ」で実践を行っている人がおり、未省察の思い込みが存在する可能性がある。経験を語ることを通して、ときには自分自身の思い込み（偏見）に気づき、自らの力で「意識変容の学習」（三輪, 2020, p.67）を行うことになるのである。

2) 少数の先行研究を協働で探究する

仕事を持ちながら研究する対人関係専門職は、仕事外の時間で先行研究を探究しなければならない制約がある。膨大な先行研究の整理により、かえって初発の研究目的が見えにくくなる大学院生もいる。実践経験の省察と言語化で、研究テーマがある程度見えてきた段階で、その範囲での先行研究を選び取って精読することで、実践知・臨床の知と理論との結びつきが得られやすくなる。指導教員は、多くの先行研究を提示するよりは、本人自身が言語化し、明確化しつつある研究テーマを確認し、それに見合う少数の先行研究を院生と一緒に探究し、読みあう指導のほうが合っているのではないかと考える。

3) 研究テーマやリサーチクエスチョンの「絞り込み」を支援する

3 年間、予備審査論文提出を考えると実質 2 年間で研究論文をまとめるという時間的制約を考えると、研究テーマはできるだけ絞り込んでおくことが大学院生にとって大事である。研究テーマやリサーチクエスチョンの絞り込みについては、a)形式的な絞り込み（時間内にできること、研究対象にアクセスしやすいことなど）に加えて、b)経験の省察による絞り込み、c)理論的な絞り込み（教員との理論的な対話や先行研究による絞り込みなど）を行いながら、大学院生自身が納得し、自分で絞り込みを行うように指導することになる。

4) 研究方法・分析方法の選択・実施を支援する

博士後期課程である以上、量的研究や質的研究、混合研究法について理解していることが求められている。しかしややもすると、研究方法の修得が独り歩きすることがある。その結果、研究方法を徹底的に理解し、適用することを重視するあまり、当初の生々しい、実践的な問題関心が薄れ、研究方法に見合う実践を研究対象に選ぶといった、「研究方法の自己目的化」現象が起こりかねないことがある。院生には研究方法は、研究目的やリサーチクエスチョンを明らかにするための「方法」「手段」であると指導している。

5) 学術的な「厳密性」と実践的な「適切性」のバランスを保つ支援をする

興味深いことに現在までのところ、対人関係専門職の大学院生が採用する研究方法は、質的研究が中心になっている。とはいえ例えば、質的研究の 1 つ修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）においても科学的な「厳密性（rigor）」が求め

られる。他方で対人関係専門職の研テーマの多くは、実践・臨床現場に関連することがらが選ばれており、また、研究成果を実践・臨床現場に還元するという点で、実践的な「適切性（relevance）」（Schon 1983, p.42 柳沢・三輪監訳, 2007, p.42）への関心が強い。

筆者は対人関係専門職の院生には「厳密性と適切性」のバランスを考えるよう指導している。ある研究方法でデータをとり「分析」する段階では、科学的な厳密性を担保しつつ、「考察」の段階では「厚い記述」など実践的な適切性を重視した考察を勧めている。

6）異なる専門職同士のディスカッションの機会を用意する

博士後期課程の論文作成作業は「孤独な作業」だと言われる。研究テーマは一人ひとり異なり、先行研究の探索も、テーマ設定も、論文執筆作業も個人と指導教員との中で行われることが通常だからである。筆者の論文指導も個別対応を軸としているが、授業やゼミでは機会を通じて、共同で意見交換する時間を意図的に設けている。

また教育学研究科修士課程や教育実践研究科（専門職位学位課程）の大学院生とともに、実践や研究上の経験を交流する「星槎ラウンドテーブル」を大学院生主体で年 2 回実施している（私は顧問の立場）。授業やゼミでの意見の交流や星槎ラウンドテーブルの営みは、大学院生にとって、経験談の交流による気分転換以上の意味を持っていると考える。

・「安心・安心」な時間と空間を用意することで、指導教員のプレッシャー、あるいは院生同士のいわゆる同調圧力から解放され、院生が本音で実践知・臨床の知を物語ることができる。またそこから深い研究関心を導き出すことができる（三輪他，2021）。
・暗黙になっている自己の実践経験の省察と言語化の営みは、じっくりと、また（教員以上に）対等な立場で聴いてくれる仲間の存在がいて初めて可能な営みである。
・異なる専門職との意見交換を通して、自分の専門職のみに通用していた狭い考え方や思い込み、専門用語の存在に気づき、相手にも分かるものへと修正することができる。
・異なる専門職同士であっても、共通の問題関心が見えることがあり、研究テーマが閉鎖的ではなく普遍的な意味合いを持ちうる点を確認することができる。例えば対人関係力、教育観をめぐるテーマなどには一定の共通性がみられる。
・異なる専門職に物語ること、通じる経験をすることは、自分の専門職が他分野にも通じる「公共的な意義があらたに与えられる」（三輪, 2020, p.85）ことを意味する。これは自分の専門職を公共的な視点でとらえ直すことにつながる。

３．指導の成果と課題

3 年目の完成年度である 2022 年度には、指導している院生一人の学位取得が見込まれている。それ以外の院生とは引き続き、上記のような指導方針で研究的な対話を続け、論

文指導を続けている。このような、筆者なりの実践の認識論をもとに論文指導ができる環境には深く感謝したいし、院生との真摯な対話が継続できることをありがたく思う。

その上で一点のみ感想を述べるとすると、ショーンに代表される実践の認識論の考えは、まだ市民権が得られているわけではないと感じることがある。アカデミックな論文指導観は、博士後期課程であるからという理由で省察を深めないまま当然視されており、研究発表会や審査会での指導観や評価観として表に出てくることが多いからである。

アカデミックな認識論も、実践の認識論も、それぞれに存在理由を持つ認識論である。お互いの枠組みを尊重したうえで、実際の院生とその指導に即しながら、両者の、対等な立場での「対話」の時間がもっとあったら良かったというのが、率直な感想である。

引用文献

今津孝次郎（2012）．教師が育つ条件　岩波書店

三輪建二（2020）．おとなの学びとは何か―生涯学習と学びあいの創造―　鳳書房

三輪建二・川田奈津子・小嶋希・竹本美奈子・谷島玲子・村田直子・茂木正浩(2021). 安心・安全な場で語り合い・聴き合うこと―第２回星槎ラウンドテーブルの報告―　星槎大学大学院紀要 *3(1)*, 67-72.

三輪建二（2023）．わかりやすい省察的実践論―実践・学び・研究をつなぐために―　医学書院.

中村雄二郎（1992）．臨床の知とは何か　岩波書店

Schon, D.（1983）. *The Reflective Practitioner. How Professionals Think in Action.* Basic Books.（D・ショーン（2007）．省察的実践とは何か――プロフェッショナルの行為と思考――　鳳書房）